みことばを友に

2022 年 11 月 6 日発行　第 3 号　神言修道会聖書使徒職委員会

「イエスの系図の登場人物（マタイ 1:1-17）」

聖書学者のレイモンド・ブラウンによれば、イエスの系図に出てくる名前は、三つに区分することができます：族長たち、王たち、そして無名の人たち。しかし、全体に共通するものがあります。そこには、弱さを通して働かれる神、罪をゆるしてくださる神、取るに足らない人たちを通して働かれる神の姿が現れているということです。

先ず、イエスの系図は族長たちから始まります。その大元となるアブラハムは信仰深い人であると同時に、臆病な人でもあります。エジプトに避難した時、彼は自分の身を守るために、妻サラを妹だとファラオに嘘をついて、愛妻をファラオに渡してしまいました。何とも頼りない人です。そのアブラハムには女奴隷のハガルから長男イシュマエルが生まれましたが、その子と母親を家から追い出してしまいました。長子権はその後に生まれた息子イサクが受け継ぐことになりました。イサクの息子は二人いますが、次男ヤコブは父親をだまして、長子権を兄のエサウから密かに奪い取りました。ヤコブには 12 人の息子がいましたが、後継としてイエスの系図に登場するのは、長男のルベンでも、愛息で誠実なヨセフでもなく、スキャンダルを起こしたユダです。このように、神はイシュマエルではなくイサクを、エサウではなくヤコブを、ヨセフではなくユダを選びました。イエスの系図には常識、人間の基準をひっくり返すようなことが起こっています。神が自分の救いの業を実現するために選んだのは品行方正、正しい人、道徳的にふさわしい人、欠点のない人ではないということです。

系図の第二のグループは王たちです。王たちのリストはダビデから始まり、バビロン捕囚まで続きますが、それはイスラエル王国の歴史の中のアンティ・クライマックスの物語です。ダビデ王からバビロン捕囚の物語は、約束の地で繁栄した王国を築き、栄華を極めながらも、その約束の地

を追われることになった民の物語です。イエスの系図の王たちの中で、ヒゼキヤとヨシヤ以外は、皆何らかの形で堕落した王たちです。偉大なダビデとその息子ソロモンでさえ、スキャンダルの多い親子です。偉大なダビデにはバト・シェバのスキャンダルがあります。知恵のシンボルであるソロモンには 700 人の王妃、300 人の側室がいます。どちらかと言えば、ダビデとソロモンは「聖人」というよりも「罪人」です。その人たちを神はイエスの祖先として選んだということです。

系図の第三のグループは無名な人たちです。バビロン捕囚からヨセフとマリアまでの人々はほとんど無名の人たちです。シャルティエルとゼルバベル以外は聖書に名が記されていない人々です。しかし、神は世間からは無名で、取るに足りない人たちをイエスの祖先として選び、救いの業を実現したのです。

新約聖書全体がこのようなイエスの系図から始まるのは、大変興味深いことです。これがマタイにとっては「福音」、「良い知らせ」の始まりです。系図に取り上げられる一人一人の名前の裏には、私たちと同じようにそれぞれの人生のストーリーがあります。人に知られたくないようなストーリーもあります。しかし、神はその一人一人に憐れみを注いでくださいます。マタイがイエスの系図を美化せず、かえってその醜い部分に光を当てているのは、罪や弱さを通して働かれる神を示そうとしているからです。これこそが福音、良い知らせではないでしょうか。

(M. Pale HERA)

聖書あれこれ

火薬や羅針盤と並んで俗に「世界三大発明」と言われる、15～16 世紀にヨーロッパに大きな変革をもたらした「活版印刷術」。発明者のグーテンベルクが最初に印刷する書籍として選んだのは、「聖書」でした。当時から「本」と言えば「聖書」だった、ということですね。この聖書はラテン語でした。1 ページが 42 行で組まれることが多かったので、『42 行聖書』と呼ばれています。180部ほどが印刷されたようですが、現存しているのは 48 部。日本では慶應義塾大学の図書館が完本を、東北学院大学と関西学院大学の図書館が不完全本を所蔵しています。

聖書週間のすすめ

毎年 11 月の第三日曜日からの一週間に設定されている「聖書週間」ですが、今年は 11 月 20 日～27 日で、フランシスコ教皇の回勅『兄弟の皆さん』より**「あなたの隣人とはだれか（ルカ 10･25-37）」**をテーマとし、**「行って、あなたも同じようにしなさい」（ルカ 10･37）**を聖書のことばとしています。カトリック中央協議会からお知らせが出されており（https://www.cbcj.catholic.jp/2022/10/20/25657/）、毎年発行されている小冊子『聖書に親しむ』の PDF 版（右の QR コード参照）も同ページからダウンロードできます。

回勅『兄弟の皆さん』にも引用されている、隣人愛に関係する聖書箇所をほんの一部ですが、黙想のヒントと共に以下に挙げました。この聖書週間をきっかけに、これらの箇所を前後の文脈も含めて読んで味わい、自分自身の「隣人」との関わりについて毎日の生活をふりかえってみてはいかがでしょうか。

「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。
これこそ律法と預言者である」（マタイ 7:12）

「律法と預言者」、つまり「旧約聖書」のメッセージをつきつめると、「自分が人にしてもらいたいことをすること」だとイエスは語られます。はたして、私は人からどのように扱われるときに喜びを感じているでしょうか。その働きかけに感謝しているでしょうか。自分が受けているものに十分に気づけなければ、それを意識的に他者に向けるのも難しいかも知れません。

「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ 19:18）

そもそも、私は「自分自身を愛している」のでしょうか。隣人に目を向ける前に、まず私が私自身をどのように扱っているでしょうか、自分自身をどのように扱ってあげたいでしょうか。

主はカインに言われた。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」カインは答えた。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか」（創世記 4:9）

隣人であること、隣人となることを拒否する言葉。私たちは日常生活の中で、同じような言葉を発していないでしょうか。「その人のことは、私には関係ありません」、「どうして私がこの人のために、何かしてあげないといけないのですか？」

「あなたは寄留者を虐げてはならない。あなたたちは寄留者の気持ちを知っている。あなたたちは、エジプトの国で寄留者だったからである」（出エジプト 23:9）

「あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者だったからである」（出レビ 19:34）

聖書の中の「寄留者」とは、生来の祖国・民族を離れて、イスラエルの社会の中で生活していた外国人でした。一定の権利と義務を与えられて永住していましたが、もちろんイスラエルの民と同等には扱われませんでした。『出エジプト記』は、イスラエルの民が自分たちもかつてエジプトで同じ立場にいたのだから、その「気持ち」を知っているはずだ、と隣人への共感とそれに伴う態度を促します。現代の日本にも、寄留者はたくさんいます。

「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（ルカ 6:36）
「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」（マタイ 5:45）

私たちの隣人愛の模範は、父なる神です。なかなか納得がいくことではありませんが、相手が善人だろうが悪人だろうが、自分の好きな人だろうが嫌いな人だろうが、避けずに関わりを持とうとすることが隣人愛の第一歩です。

「どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてくださいますように」（一テサ 3:12）

隣人愛とは、仲間内や家族などの小さなコミュニティの中だけの愛ではありません。「すべての人」が私の「隣人」になりえます。

「行って、あなたも同じようにしなさい」（ルカ 10:37）

「善いサマリア人のたとえ」を語り終えたイエスからの、律法の専門家への呼びかけです。たとえに登場するサマリア人は自分から近づいていって、自らが傷つき倒れている人の隣人になりました。既知の隣人が傷ついたから助けたわけではありません。「誰が隣人であるか」ではなく、「誰の隣人になるか」が問われています。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ 12:15）

隣人となることは、「親切」の一方的な押しつけではありません。まずは、どれだけ大きなことをするかよりも、自分の心を開くこと、目の前の相手を見て、その心によりそうことが第一歩となります。

聖書あれこれ

「聖書」を英語で“Bible”と言いますが、その語源になっているのはラテン語の“biblia”（ビブリア）であり、更にさかのぼってギリシャ語の“βιβλία”（ビブリア）に由来します。このギリシャ語の単語は複数形で、もとの単数形は「ビブリオン」ですが、本来は「聖書」ではなく、「本」一般、あるいは様々な形態の「文書」、さらには「紙」を意味していました。

その語源は諸説ありますが、古代の紙の原料である「パピルスの芯」を指す言葉だったとか、エジプトからパピルスを輸入してギリシャに輸出していた、フェニキアの「ビブロス」という都市の名前から派生した、とか言われます。

ともかく、「本」「文書」を指していた言葉が、「書かれたものの代表といえば聖書でしょ」というわけで、「聖書」を意味するようになったということです。

「すべてを治める『万軍の』神なる主？」

2022 年 11 月 27 日の待降節第 1 主日から、新しい「ミサの式次第」が用いられるようになります。慣れるまでに時間がかかりそうな、いくつかの大きな変更点がありますが、その一つが感謝の賛歌です。たとえば冒頭の言葉、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の神なる主」が「聖なる、聖なる、聖なる神、すべてを治める神なる主」という表現に変更されています。日本カトリック典礼委員会編集の『新しい「ミサの式次第と第一～第四奉献文」の変更箇所』によると、「現行版の『万軍の』は戦いを連想させる表現なので変更が求められて（いた）」という理由から表現が改められたようです。それでは、そもそもこの「万軍の」という言葉はどのような表現なのでしょうか。

「感謝の賛歌」は、聖書の言葉をもとにして補足を加えて賛美の歌にしたものですが、賛歌の前半はイザヤ 6:3 の「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」に由来します（ちなみに後半部分は、受難前の主のエルサレム入城の時に群衆があげた言葉［マタイ 21:9］に基づいています）。このイザヤ書の箇所で「万軍」と翻訳されている言葉は、ヘブライ語の「ツァーバー」という語の複数形である「ツェバオート」です。旧約聖書では、神様の呼び名の一部として使われる「ツェバオート」の形がおよそ 285 回、それ以外の意味で用いられる「ツァーバー」の様々な形が 200 回ほど見られます。

本来、「ツァーバー」は、「軍」や軍の「部隊」を意味します。たとえば、サムエル記下 3:23 や歴代誌上 19:8 で、ダビデの将軍ヨアブが率いる「軍」を指しています。その他、「軍隊」になぞらえた集団を指す言葉として、民数記の 2 章では、出エジプト後にモーセに率いられて荒れ野を旅するイスラエルの人々が、部族・氏族や家系ごとに「部隊」を組織して行進して行く様子が描かれています。

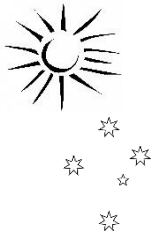
また、たとえば申命記 4:19 やエレミヤ 8:2、19:13 などでは、太陽･月･星などの天の「万象」を指す言葉となっています。「異教では礼拝の対象になっているこれらの万象でさえも神様の支配下にある」というわけです

が、歴代誌下 18:18 で預言者ミカヤが「主が御座に座し、天の万軍がその左右に立っている」と語っている箇所では、「ツァーバー」が天の万象の「軍隊」というより、天上の神の会議の構成員たちとして、神話的な天上の世界のイメージを描き出すものとなっています。

さて、感謝の賛歌にもある神の呼び名、「ツェバオートの主」あるいは「ツェバオートの神、主」という表現ですが、非常に古い伝承に由来するらしいということもあって、その正確な意味を解き明かすのは非常に難しい問題です。確かに、イスラエルの民を率いて戦う神のイメージもあります。ペリシテ軍に対して劣勢にあるイスラエルにあって、ダビデがペリシテの巨人ゴリアトと対峙したときの言葉、「わたしはお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう」（サムエル机上 17:45）に表れている通りです。

しかし、実際の戦争・戦闘を離れた象徴的な表現として使われることが多く、「天の万軍（つまり天体）を創られた主」という意味が込められた短い表現である、とする考え方や、より抽象的な「力ある主」・「全能の主」を意味するのだ、という説もあります。実際、古代のギリシャ語訳聖書では、このヘブライ語の表現を「力の主（キュリオス パントクラトール、キュリオス トーン デュナメオーン)」などと翻訳しています。ただ、古代ギリシャ語訳でも「サバオートの主」というように「ツェバオート」をそのまま音写して訳している箇所が多くあり、昔の人にとっても意味を特定するのが難しかったのだと推測されます。現代の私たちがよくわからないのも当然です。

確かに「ツェバオート」は、もともと「軍」に関わる言葉に由来していますが、それにとどまらない神の偉大さを示す言葉として用いられてきました。決して暴力的で好戦的な神を描く表現ではありません。地上でも天上でも、主こそすべてのものを従わせる力を持つ方であり、他に神はおられない、そんな信仰告白の表現の一部です。直訳に近い「万軍の」という日本語の表現を比喩的に捉えられればいいのでしょうが、あまりにも言葉の意味を狭くしていると感じられるために、「すべてを治める」という表現に改められた、ということでしょう。



聖書あれこれ

グーテンベルクの『42行聖書』以来、数え切れないほどの聖書が印刷、発行されてきました。3000 以上の言語に翻訳されたと言われ、正確な発行部数は把握できないほどですが、一説には、部分訳も含めて 50～150 億部、研究者によっては 4000 億部弱（ホント?!）だとされるほどです。ちなみに、単一書籍としての『ドン・キホーテ』や『ハリー・ポッター』シリーズ全体の発行部数がそれぞれ約 5 億部だそうです。そう考えると、聖書のケタ違いのすごさが際立ちますが、この 2 作品もかなりのベストセラーだと驚かされますね。

後記

初夏の緑も秋の紅葉も、季節ごとに、比較できないそれぞれの美しさを見せてくれます。神の言葉も、それを受けとめる私たちの心、置かれた状況に合わせて、その時々に必要な恵みを与えてくれます。この小冊子が、みことばの豊かさを示す一つの小さな「しるし」となることを願っています。

お知らせ

神言会の聖書使徒職委員会ではホームページを開設し、毎主日の聖書朗読箇所についての黙想のヒントなどを掲載しています。また記事の更新を twitter を通してお知らせしています。どうぞご活用ください。

神言会聖書使徒職委員会ホームページ
http://svdjpba.net/

聖書使徒職委員会 twitter アカウント
https://twitter.com/svdjpba

2022 年 11 月 6 日 発行
カトリック神言修道会 聖書使徒職委員会